村では平成26年度から、「地域社会と原子力」をテーマに、社会科学の視点でこれからのまちづくりを考える契機となるよう、若手研究者への支援事業を続けてきました。事業開始から10年目を迎えるにあたり、これまで支援した研究者からの報告や東海村へのメッセージを、リレーエッセーの形式でお伝えします。

【地域社会と原子力に関する社会科学研究支援事業】リレーエッセー

若手研究者からのメッセージ

福島からみえてくる原発との向き合い方とは

東北学院大学 東北文化研究所 客員研究員　庄司　貴俊

私は令和元(2019)年度に、福島原発被災者の生活再建をテーマに研究支援事業に採択されました。原発事故後、人々はどのように自らの生活を取り戻そうとしているのかを、農家への聞き取りから考えました。現在は、本研究支援事業をきっかけに関わるようになった浪江町請戸の漁業関係者に話を聞いています。

請戸は原発に最も近い港ですが、漁師からは「この海で生きてゆく」強い想いが聞かれます。事故により魚が取れなくなったり、取れるようになっても処理水の放出が決まったりと、海で暮らしを成り立たせていく困難が福島にはあります。それでも人々は黙々と漁を行い、海と向かい続けています。

私は、こうした漁師の姿に原発との向き合い方のヒントがあると思います。原発という大きな力を前に「何もできない」ではなく、「何かできる」自分を懸命に模索し続ける姿が見られるからです。模索することは当事者意識を生み出し、事態が動いた時に即座に反応することを可能にします。

東海村で暮らす皆さんは、身近にある原発とどう向き合っていくか、思いを巡らせたことがあると思います。ただ難しい問題ですので、なかなか考えがまとまらず悩んでいる方もいるのではないでしょうか。福島で調査してきた私からお伝えできることは、少なくとも模索を続けること、それ自体に大きな意味があるということです。だからこそ、私自身も皆さんと共に原発との向き合い方について考えていきたいと思います。

報告書はこちら▶

【問い合わせ】産業政策課産業政策推進担当(☎282-1711 内線1269)

村内等で行われた活動やイベントを紹介します　ず～むあっぷ「まちの風景」

各種コンクール・スポーツ分野で児童・生徒が活躍しました！

村内の小中学生が村長を表敬訪問し活躍を報告

12月19日、令和６年度の各種コンクールやスポーツ分野で顕著な活躍のあった児童・生徒６人が役場を訪問し、村長へその活躍を報告しました。村長からは、「皆さんの努力に加え、いろいろな人に支えられての結果であることも忘れないでほしいと思います。この経験を自信にするとともに、ぜひ次のステップに生かしてください」との言葉が送られました。

【報告内容等】

報告内容	児童・生徒
「茨城県交通安全ポスター作品コンクール」県知事賞を受賞	増野佑希人さん(村松小３年)
「茨城県小・中学校等読書感想文コンクール」最優秀賞を受賞	稲田佳純さん(石神小４年)、小林礼奈さん(東海南中１年)
「全国中学生人権作文コンテスト茨城大会」最優秀賞を受賞	廣原一花さん(東海中２年)
「ＪＦＡエリートプログラムU-14」で日本代表として日韓交流戦に参加	木田蓮人さん(東海南中２年)
「ＪＯＣジュニアオリンピックカップ第55回 U-16陸上競技大会」ジャベリックスロー第５位入賞	吉澤誠士郎さん(東海南中３年)

【写真左から】河西教育部長、小林さん、山田村長、稲田さん、吉澤さん、増野さん、木田さん、廣原さん、伴教育長